

【7】コミュニケーションに視点をあてた実践にみられた成果

ここでは、授業づくりの取り組みを通して培った力を発揮し、自信を持って生き生きと自己表現したり、主体的に他と関わろうとしたりするようになった姿を、一部を取り上げて紹介する。

〈学習発表会での姿〉

学習発表会では、毎年高等部全員で劇の発表を行っている。劇の内容には学級での『自分づくり』をねらった学習を盛り込み、学習の成果の場とした。『自分さがしの旅』をするというストーリー展開の中で、自分の生い立ちや成長の過程を振り返り、今の自分とこれからの自分についての思いや・将来の夢・展望を、歌や台詞で綴り表現した内容となっている。

広い会場や大勢の観客を意識した取り組みは、授業づくりの中で培ってきた『自己表現しようとする意欲・声の大きさ・明瞭さ・感情をこめた表現・視線・姿勢・身だしなみ等』を発揮する場となった。劇の流れの中で友だちの演技に耳を傾けたり、高校生としての自分たちを意識して大人らしい振る舞いをしようとする姿が見られるようになった。

練習の回数を追うごとに、「僕は大人になってきたんだ。これからどうなっていくのか。～みたいになりたい。」と自分を見つめ直し想いを巡らせるようになったことが、その取り組みへの前向きな姿勢や態度から推察できた。

劇を仲立ちとして家族や友だちとの会話がはずんだり、人前で自己表現できたことへの自信から、生活全般にわたって以前よりもずいぶんと意欲的に生き生きと活動する姿が見られるようになった生徒が多かった。

〈現場実習での姿〉

現場実習では、「自分から他と関わることが苦手なために、休憩時間を一人で過ごす」「報告や質問ができないために、指導する大人がそばにいないと仕事に携われない」といったコミュニケーションに関係した内容での課題点が比較的多い。実習先に適応していくためには、技能の習得と同等に人間関係を調整し他とうまく関わっていく力が要求される。生徒の実態にもよるが、1年次と3年次の現場実習での評価とを比べてみると、次のようなことが顕著な変容として見られた。

- ・相手が意識してあいさつを待ってくれないとできにくいといった評価から、進んで元気よくあいさつができるという評価を受けた生徒が多くなった。
- ・自主的な報告は難しいという評価が多かったが、終了の報告や次の指示を仰ぐことができるようになり、『やる気がある。仕事を安心してまかせられる。』というプラスの評価を受ける生徒の数が増えた。

これは、自分の進路を切り開いていくための一つの過程として現場実習を捉え、自分の将来（働く生活）を意識するようになってきた現れだと考えられる。また、報告・返事等の基本的なパターンの指導による成果が、職業科の時間だけでなく、実社会の働く場で現れるようになったと考えられる。

「声かけや注意を受けてから報告する」段階から「他との関わりの必要性を理解して報告する」段階にまで生徒の意識が高まったと考察される。